

山梨県立文学館

Yamanashi Prefectural Museum of Literature

館報

No.122

2026.4
→ 2026.9

企画展

2026年7月4日(土)～9月23日(水・祝)



日本中の子どもたちを笑顔にした 絵本作家

かがくいひろしの世界展

©Hiroshi Kagaku

©Hiroshi Kagaku

そのことばのつづきへ



山梨県立文学館

Yamanashi Prefectural Museum of Literature

累計発行部数1,000万部を突破した絵本「だるまさん」シリーズの作者かがくいひろしは、特別支援学校の教員でした。障がいのある子どもたちと向き合い、ともに過ごした経験がのちの絵本づくりへと繋がり、50歳で絵本作家としてデビューしました。擬音語、擬態語とともに楽しい仲間たちが躍動する絵本は、読む人みんなを笑顔にし続けています。本展では、全16作品の原画やアニメーションで絵本の世界を楽しんでいただくとともに、かがくいがアイデアを描き溜めたノート、教員時代に手がけた教材などから創作の原点に迫ります。

／ ビロンビロン／



「おもちゃのきもち」原画 2004-2005年
©Hiroshi Kagaku / 講談社

／ パッカー／



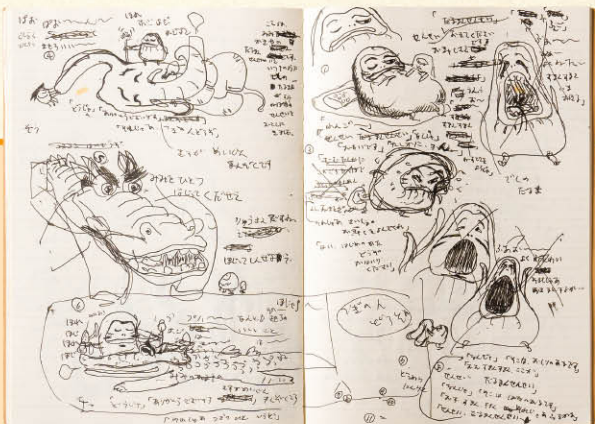
「なつのおとずれ」原画 2008年
©Hiroshi Kagaku / PHP研究所

／ ぴーす／



『だるまさんと』原画 2008年
©Hiroshi Kagaku / Bronze Publishing Inc.

絵本になる前のアイデア



関連イベント

「かがくいひろしの世界展」関連イベントとして講演会、ワークショップ等を予定しています。詳細や申込方法は当館ホームページやチラシで順次発表します。

小説でもなくエッセイでもなく

紅野 謙介

詩人である伊藤比呂美の『わたしのおとうさんのりゅう』（左右社、二〇二五年）を読んで、『とけ抜き 新果鴨地蔵縁起』（二〇〇七年）以来の傑作だと確信した。このところの伊藤の著作は詩でもなければ、小説でもなく、エッセイにも分類できない。印刷工場で働いていた父の思い出をさかのぼり、そのお父さんが校正刷で読ましてくれた「エルマーのぼうけん」、そしてお父さんの背中に彫られていた龍の刺青の話へとつづき、父親の戦中から戦後の変転がたどられていく。回想、自伝の一種とも言えるが、その語りのリズム、文体は明らかにエッセイの枠を超えている。

ジャンルに収まりきらない読み物がある。とりわけ日本の文学に多い（と断言できるほど世界文学に通じているわけではないけれど）。語り手が登場し、ときに他の人物とのやりとりを記し、情景を描写する。それによって多くの虚構ではなく、とはいえ記録やエッセイそのままというわけでもない。小説とエッセイを両方の極において、そのあいだを自由に行き来するようなジャンルとも言おうか。

徳永直の『日本の活字 光をかかぐる人々』（一九四三年）などはその典型だが、森鷗外の『サフラン』（一四年）も小説にもエッセイにも分類できない。『濫江抽斎』（一六年）から始まる鷗外の史伝もそのひとつだ。永井荷風や幸田露伴はその境界を心得ていた作家たちだろう。谷崎潤一郎の『吉野葛』（三一年）はこのジャンルの特徴を巧みに取り込んだ小説だし、『吉野葛』に刺戟を受けた花田清輝は『吉野葛』注を書いた（『室町小説集』七三年）。花田には『鳥獣戯話』小説平家など、この系譜に立つ創作がある。『廣・久坂藩子伝』（五六年）に始まる富士正晴の評伝などもあがってくるだろう。堀田善衛の『ゴヤ』（七四〜七七）もそうだし、後藤明生の『吉野大夫』（八一年）も加えることができる。

随筆、随想とは明らかに違い、構成の意思、文体の緊張がある。記憶をたどり、ときに資料を調べ、ヒトやモノやコトバに即して想像をめぐらせる。その「私」の行程を追いながら、人のゆくたて、歴史の移ろいを言葉でたどる。そうした散文の伝統がたしかにある。

『光をかかぐる人々』の「私」はいつも自分は無知であることわりつづける。「私はかつてクリスチャンであったこともないし、また学問的な意味でも、基督教についてはほとんど知らない」「私など、もともと地理とか歴史とかに疎い方ではあるけれど……」。鷗外や露伴、荷風のような文人ではない。しかし、印刷工としての経験と直観が活字の歴史を追いかけて「私」を動かしていく。「私」が見出すのは、大文字の歴史に残されなかった「歴史の凹み」である。「何という無数の、ぼう大な歴史の凹みであるだろう」。「私」はそのような感慨を洩らす。その「歴史の凹み」のなかに人々の営みは吸収され、忘れられていった。その「凹み」の手触りがここにはある。それは歴史を俯瞰するまなざしではとらえきれない感触である。

歴史をしらべるといふことは、本人の意図と、努力のいかんにかかわらず、偶然や必然の条件がともなう、特別な「時間」というものがあるのだった。不馴れな私は、苛らだちながら、手もちぶさたな日を過ごさねばならなかったが、すると、また、こんどは思いがけない幸運が、私に舞いこんできた。『光をかかぐる人々』

そう、運と不運は紙一重でもあるし、不運が「思いがけない幸運」をもたらすこともある。幸田文は小説から離れて、木々を求め、崩れた山々を探し歩くなかであれだけ自由で魅力的な著作をものにした。保坂和志や滝口悠生の本にも類似した傾向がありありとうかがえる。小説の物語形式に依然として魅力があることはそのとおりだが、形式から自由になった散文は歴史的にもすてに広い眺望を見せているのではないだろうか。

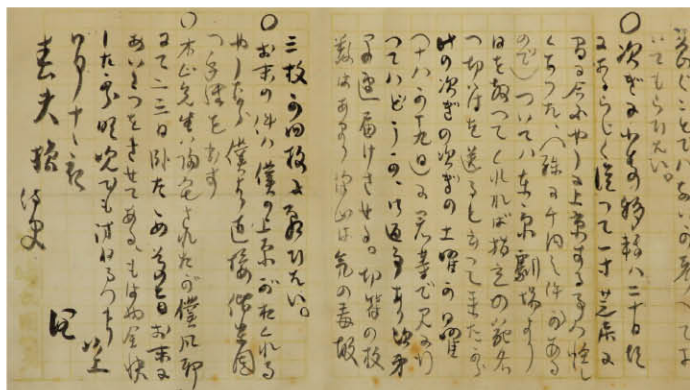
（こののけんすけ 日本大学名誉教授）

公益財団法人 日本近代文学館専務理事

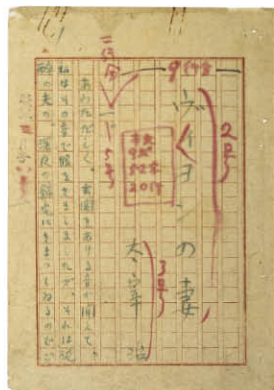
特設展 昭和文学をふり返る — 収蔵資料より

2026年は、昭和元年から100年目を数えます。戦争をはさんで、大きな時代の変化とともに生み出された昭和時代の文学を、芥川龍之介、谷崎潤一郎、井伏鱒二、山本周五郎、太宰治、檀一雄、武田泰淳、津島佑子、李良枝などの収蔵資料を中心にふり返ります。

会期 2026年4月25日(土)～6月14日(日)



谷崎潤一郎 佐藤春夫宛書簡 1931(昭和6)年4月10日(末尾部分)



太宰治「ヴィヨンの妻」原稿
(寄託資料)
「展望」第15号(1947年3月)掲載

常設展

第1室～第4室(展示室A)

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第1室でテーマ展示を次のとおり行います。

春の常設展「檀一雄 歿後50年」

2026年3月10日(火)～5月31日(日)

夏の常設展「津島佑子 歿後10年」

2026年6月2日(火)～8月30日(日)

秋の常設展「芦澤一洋 歿後30年」

2026年9月1日(火)～11月29日(日)

第5室(展示室B)

山梨県出身・ゆかりの文学者104名をジャンルごとに前後期に分けて展示します。

前期:小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡

2026年4月14日(火)～6月7日(日)

イベントガイド

*各イベントの詳細や申込方法は、当館ホームページやチラシで順次発表します。
記載内容に変更がある場合がありますので、ご確認の上、お申し込みください。

特設展「昭和文学をふり返る ―収蔵資料より」関連イベント

川本三郎 講演会

5月30日(土) 午後1時30分～午後3時
会場:講堂 定員:500名 無料

朗読公演会 文学座「ひかりごけ」

原作:武田泰淳
6月7日(日) 午後2時～午後3時15分
会場:講堂 定員:500名 無料

出演者



相川春樹



武田知久



松浦慎太郎



比嘉崇貴

その他のイベント

三枝浩樹 初心者短歌教室(全2回)

歌人の三枝浩樹による講義・実作指導。2回とも出席できる方、お申し込みください。
1回目 5月16日(土) 午後1時30分～午後3時
2回目 6月27日(土) 午後1時30分～午後3時
会場:研修室 定員:20名 無料

保坂敏子 俳句教室(全2回)

俳人の保坂敏子による講義・実作指導。2回とも出席できる方、お申し込みください。
1回目 6月14日(日) 午前10時～午前11時30分
2回目 7月 5日(日) 午前10時～午前11時30分
会場:研修室 定員:30名程度 無料

消しゴムはんこ教室

消しゴムはんこ作家アオヤギルミによる実作指導。
7月26日(日) 午後1時30分～午後3時 会場:研修室 定員:20名 材料費:500円

小さな本(ZINE)作り教室

芸術家よしだあさおによる手作り小冊子(ZINE)の制作指導。
作った作品はお持ち帰りいただけます。
7月18日(土) 午前の部:午前9時30分～午後0時30分
午後の部:午後1時30分～午後4時30分
会場:研修室 定員:各部20名 材料費:500円



ZINEフェスティバル2025の様子

ZINEフェスティバル2026

県内外から集めた様々なZINEの展示や無料配布を行います。
7月19日(日) 午前10時30分～午後4時 会場:研修室 入場無料・入退場自由

未来の小説家たちへ ―川上健一 次世代のための小説創作教室―

山梨県在住の小説家、川上健一による小説教室。対象:15～25歳
1回目 8月 8日(土) 午後1時30分～午後4時 講義・実践
2回目 10月24日(土) 午後1時30分～午後4時 事前提出課題の批評
会場:研修室 定員:各回10名程度 無料
連続教室ではありませんので、各回でお申し込みください。

年間文学講座

*講座1・2ともに午後2時～午後3時30分

*講座3は午後2時～午後3時10分

*4月21日(火)午前9時よりお電話にてお申し込みください。

*年間を通してのお申込みも可能です。先着順で受け付け、定員になり次第締め切ります。

講座1 (古典文学) 平安朝の娘と父親 —『源氏物語』と『栄花物語』を中心に—

講師：池田尚隆 (山梨大学名誉教授) 会場：講堂 定員：200名 無料

5月 9日(土) 教育、結婚と後見

6月13日(土) 密通への怒り

7月 4日(土) 死後への不安

8月22日(土) 父親死後の不幸

9月19日(土) 父の死後、面目を施した娘たち

10月10日(土) 藤原道長の栄華と娘たち

11月14日(土) 藤原道長と娘たちの死

12月 5日(土) 藤原公任・藤原行成・藤原齐信と娘

講座2 (近現代文学)

詳細が決まり次第、当館ホームページ、チラシ等でお知らせいたします。

講座3 作家と作品

会場：研修室 定員：70名 無料

5月17日(日) 高室有子(当館学芸員) 特設展「昭和文学をふり返る」の見どころ

6月21日(日) 中野和子(当館学芸員) 津島佑子の作品世界

8月 9日(日) 伊藤夏穂(当館学芸員) 企画展「かがくいひろしの世界展」の見どころ

11月 1日(日) 保坂雅子(当館学芸員) 樋口一葉の住んだ家と物語の家

名作映画鑑賞会

5月23日(土) 「山と谷と雲」 原作：檀一雄「女の山彦」 監督：牛原陽一
出演：石原裕次郎、北原三枝、金子信雄他 モノクロ 96分(申込開始日 4月14日)

8月 2日(日) 「かがみの孤城」 原作：辻村深月 監督：原恵一 アニメーション
声の出演：當真あみ、北村匠海、板垣李光人他 116分(申込開始日 6月16日)

*2回とも上映は午後1時30分から。会場：講堂 定員：300名 無料

*電話または当館ホームページの「イベント」欄の申込フォームからお申し込みください。

先着順で定員になり次第締め切ります。

閲覧室

入場
無料



資料紹介

定期的にテーマを設け、所蔵する図書、雑誌を紹介しています。
資料は、直接手にってご覧いただけます。

閲覧室資料紹介

「昭和文学再発見」

4月24日(金)～6月14日(日)

「こどもの本の世界」

7月3日(金)～9月23日(水・祝)

季節のミニ展示

「雨を楽しむ文学」

6月17日(水)～7月1日(水)

山梨ゆかりの文学者資料紹介

「桜花爛漫 宇野千代の人と作品」 9月26日(土)～2027年2月25日(木)

閲覧室トーク

閲覧室の利用方法や、書庫で保存している貴重な図書・雑誌についてご案内します。

5月3日(日・祝)／7月12日(日)

各回とも午後1時30分～午後2時 定員10名(先着順) 無料

*事前に電話または閲覧室カウンターでお申し込みください。

寄贈資料より

(2025年8月～2026年1月)

- 橘田和樹氏より「太宰治記念碑建立募金記録」ノートなど特殊資料72点、図書123点、雑誌181点。
- 井村英之氏より津島佑子「ゴミ昇天」原稿など特殊資料61点、図書11点、雑誌9点。
- 伊藤季恵氏より飯田龍太「ともどもに月日はるけき小春かな」一枚物など特殊資料5点。
- 成島香里氏より飯田龍太「三伏の闇はるかより露のこゑ」色紙など特殊資料2点、図書6点。
- 内野珠美氏より三枝昂之「霜は花と咲きて凍れる冬の詩を星とならざる射手にささげむ」額装1点。
- 山廬文化振興会より「飯田蛇笏・飯田龍太文学碑第11回碑前祭俳句会作品集」1点。
- 備仲臣道氏より備仲臣道「叙事詩 桜の花の満開の下」印刷資料など特殊資料2点。
- 細川博氏より松永伍一「月光のメルヘン」原稿など特殊資料89点、図書12点、雑誌1点。
- 小林健志氏より伊藤生更「八か嶺の麓の村にはやく寝て暗かりにものを云ふそしたしき」軸装など特殊資料5点。
- 矢羽勝幸氏より「近世後期俳人の住所録『俳家通称録』翻刻と紹介」抜き刷り1点、図書1点。

*以下、第33回やまなし文学賞受賞作新聞連載挿絵

○戸潤幸夫氏より戸潤幸夫画「蝉の声」挿絵原画19点、図書1点。

○堀内洋子氏より堀内洋子画「野良猫」挿絵原画3点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

秋元千恵子	石井宏紀	石割透	岩下哲典	兎束保之	小笠原ヨウ子	長田結花
小沢啓子	笠原玲子	亀山昭子	佐々木啓子	高橋正明	谷口ちかえ	林桂
深沢美恵子	福嶋朝治	藤森富士夫	前田速夫	松本章男	三島利徳	山根史郎
渡邊範子	渡邊美枝子					

この他に団体の方々からもご寄贈いただいております。

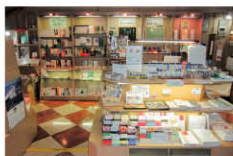
ご案内

Information

内容が変更になる場合がございます。ご来館前に当館ホームページを必ずご覧ください。

開館時間

展示室	午前9時～午後5時 (入室は午後4時30分まで)
閲覧室	午前9時～午後7時 (土・日・祝は午後6時まで)
ミュージアム ショップ	午前9時30分～午後4時20分



ミュージアムショップ

*営業時間は変更になる場合があります。

休館日(4～9月)

4月	6・13・20日
5月	7・11・18・25日
6月	1・8・15・22・29日
7月	6・13・21・27日
8月	3・17・24・31日
9月	7・14・24・28日

展示室観覧料

	常設展(特設展)		美術館との 共通券	企画展		常設展と企画展の セット券
	個人	団体 (20名以上)		個人	団体	
一般	330円	260円	680円	600円	480円	740円
大学生	220円	170円	340円	400円	320円	490円

*団体料金は20名以上の団体、県内宿泊者割引料金。

*大学生は学生証を提示。

- *次の方は無料
- ・高校生以下の児童・生徒(高校生は学生証を提示)
 - ・65歳以上(年齢が分かるものを提示、県外在住者は常設展のみ)
 - ・障害者とその介護者(障害者手帳を提示)

施設利用のお申込みについて

- 講堂・研修室・茶室のお申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- お申込みは開館日の午前9時より受け付けます。文学館チケット売場まで申請者の印鑑をお持ちのうえ、お越しください。受付時間は午前9時～午後4時30分です。
- 電話での仮予約が可能です。本申請前にぜひご活用ください。(055-235-8080)
仮予約の受付時間は午前10時～午後4時30分です。
- いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意はお申込みの際、ご説明いたします。

交通のご案内

中央自動車道

- 甲府昭和インターチェンジより約10分
- 双葉スマートインターチェンジより約10分 ※ETC専用

中部横断自動車道

- 白根インターチェンジより約20分

JR中央本線甲府駅より

- JR甲府駅バスターミナル(南口)1番乗り場より、03・04系統 竜王駅経由で敷島営業所、30系統 貢川団地、35系統 大草経 由韋崎駅、39系統 御勅使各行ききのバスで約15分、「山梨県立美術館」下車。(340円)
※山梨県立文学館ホームページからも、バスの時刻表をご覧ください。
- タクシーで約15分。



Xでタイムリーに
情報をお届けしています。

山梨県立文学館



@yamanashi_art_literature_park

ホームページ



そのことばのつづきへ

山梨県立文学館

Yamanashi Prefectural Museum of Literature

〒400-0065 山梨県甲府市貢川1-5-35
TEL: 055-235-8080 FAX: 055-226-9032
https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/